『醍醐寺金堂の移築記念日条例』最終話

醍醐寺に運ばれていった湯浅のお堂をさがして

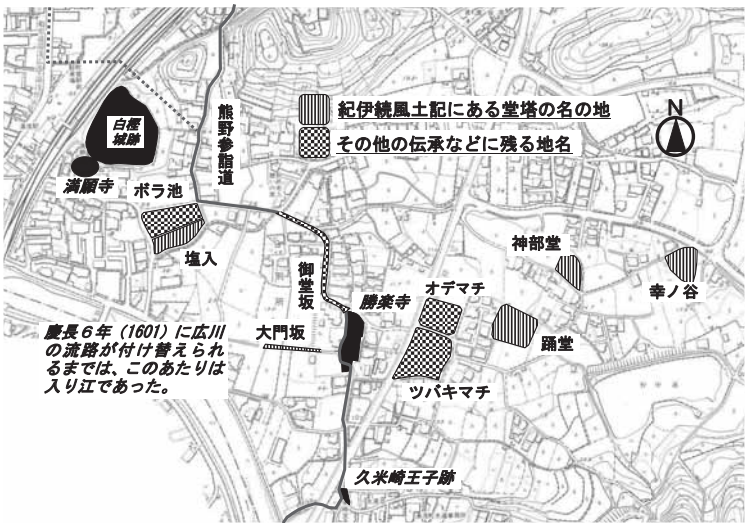
醍醐寺に伝わる『義演准后日記』には、湯浅にあったお堂を解体して運び、醍醐寺の金堂として再建したことが記されていますが「紀州ユアサノ本宮」、「紀州湯浅ノ本堂」とあるだけで、湯浅のどこにある何という名前のお寺のお堂だったのかまでは書かれていません。では、お堂が建っていた場所を知る手掛かりはもう他にないのでしょうか。

江戸時代末期の天保10年（1389）に発行された『紀伊続風土記』の満願寺の条に「村の東南の端にあり伝えいふ　後白河院の勅願所にして光秀上人の開基なり　昔は七堂伽藍三十六坊ありしに　天正の頃高野山木食興山豊太閤に乞ひて　本堂は山城国醍醐に移し本尊は高野山へとり　二王は熊野那智山へ引移せりといふ」と、醍醐寺に関する記述があります。また、「奥院を別所山勝楽寺といふ　是又堂塔ありしに当寺頽廃の後浄土宗となる　当寺より勝楽寺の辺に堂塔の名田地の字にのこれり」と勝楽寺を奥ノ院と位置づけ、大門坂、塩入寺、踊堂など堂塔の名が残る地名を数多く挙げています。

伝承では、満願寺は平安時代末期に創建されましたが、後に退転して廃寺となり、室町時代には白樫氏がそこに居城を構えていました。現存する満願寺は白樫氏の没落後、寛文12年（1672）に不動院という山伏が旧名の満願寺を寺号として当地で再建したものです。勝楽寺も平安時代末の創建と伝えられ、室町時代には衰退していました。江戸時代にはますます荒廃しましたが、享保11年（1726）に深専寺第十八世住職顕空上人によって本堂が再建されました。寺運の衰勢や往時の地形的条件、平安後期の仏像群が継承されていることなどを考慮すると、『紀伊続風土記』編さん当時の寺院の勢力から満願寺と勝楽寺の伝承が混同したのではないかと考える研究者もいます。確かに『紀伊続風土記』が書かれたのは、お堂が運ばれていった慶長3年（1598）から240年が経ってからで、記述を裏付けるような遺構も見つかっていません。湯浅にあったお堂は、満願寺や勝楽寺の周辺に建っていたとする説が今のところ有力ですが、全く違う場所にあった可能性も大いに残っています。

お堂があった場所はわからないままですが、400年以上の時を経て今も醍醐寺に建っていることに間違いはありません。その醍醐寺には、平成25年6月に新たに国宝に指定された『醍醐寺文書聖教』という69，383点にのぼる古文書をはじめ多くの史料が伝えられています。これらの研究が進み、新たな史実が判明すれば、醍醐寺から湯浅町に連絡すると約束してくれています。それからお堂が建っていた場所は謎に包まれたままですが、皆さんが普段通っている場所のすぐそばに、もしかしたら立派なお堂が建っていたかもと想像してみるのも、ロマンがあっていいのではないでしょうか。

『醍醐寺金堂の移築記念日条例』の解説を4回にわたり連載してきました。最初にお伝えしたとおり、5月3日を記念日とする条例は、湯浅町を「ふるさとの発展のために尽力する優れた人材が育まれるまち」にするために制定されました。湯浅町の歴史の一端にふれてみて、少しでも何か感じる気持ちが芽生えたなら、条例の目的に一歩近づいたと言えるでしょう。



満願寺と勝楽寺周辺に残る堂塔の名の地名